

特別展 ^{まきえ}大蒔絵展 —漆と金の千年物語

三井記念美術館(日本橋) MOA 美術館(熱海) 徳川美術館 22.10.01~11.13



「蒔絵」は、漆で絵を描き金粉や銀粉を蒔きつけて文様をあらわす技法で、奈良時代頃に中国から日本に伝わったとされ、平安後期には日本人の美意識に合わせた意匠が形成され、日本文化において長きにわたり理想美の象徴となり、漆器、家具、仏壇や文法具の万年筆などの装飾に幅広く用いられている。

本展は、3館が共同で開催するもので、平安時代から現代の漆芸作品にいたるまで、3会場で国宝25件、重要文化財51件を含む「188件」を展観している。

東京会場では、「蒔絵」を一堂に展示して8章で歴史を辿るもので、前半4章では平安から室町までを振り返り、当時から「蒔絵」が貴族の日常に登場していたことが伺える。第5章では、「豊臣秀吉威」の全国統一で世の中が転換期を迎えた桃山時代の「蒔絵」をとりあげ、手間の少ない平蒔絵の技法により簡素化し文洋が大きくなり外人の要望の南蛮漆器が登場している。

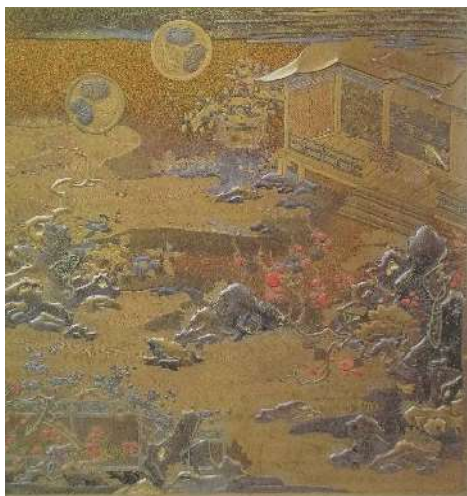
第6章では、江戸時代の「蒔絵」が集められ、今展の目玉である『源氏物語』をモチーフにした金銀を惜しみなく使用した品々が展示されている。

最終章では、「室瀬和美」ら戦後の人間国宝の作品を展示し、現在も新たな表現が生みだされる「蒔絵」の系譜を振り返って伝えている。

こうあみちようじゅう
幸阿弥長重

はつねまきえすずりばこ
《初音蒔絵硯箱》

1639年(江戸時代) 国宝 徳川美術館蔵



徳川幕府が、政治・財力共頂点時の豪華絢爛な調度品で、三代将軍「徳川家光」の長女「千代姫」が、尾州家二代「光友」へ與入れの際に調整した婚礼調度の一つである。

意匠は『源氏物語』「初音」の帖に基づく歌意を表したもので、文字は金銀を取り混ぜて葦出(あしで)風に造り山の稜線に巧みに隠して、「鶯」は文字ではなく、金の金貝(かながい)で表わしている。

東京会場の三井記念館では「国宝7件」「重文32件」を含む「計127件」を展示して、各時代を代表する名品に、現代の人間国宝を加えた選りすぐりを紹介している。